

## と畜場でみられた牛の心臓腫瘍

食肉衛生検査所

○山本香織 中澤孝文

### 1. はじめに

動物においても人においても、心臓原発腫瘍は少ないとされている。今回と畜場において牛の心臓腫瘍をみとめ、病理学的検索を実施したので報告する。

### 2. 材料と方法

症例は一般畜として搬入された牛、黒毛和種、牝、28ヵ月齢。と畜検査時に腫瘍がみとめられた心臓を採材した。材料は10%中性緩衝ホルマリン溶液で固定後、定法に従ってパラフィン切片を製作しHE染色を実施した。

### 3. 結果

【生体検査】異常なし

【肉眼所見】と畜検査において、心内膜面に約5 cm×10 cmの腫瘍をみとめた(図1)。腫瘍表面は平滑で、断面は黄白色から暗赤色を呈していた(図2)。腫瘍は左室乳頭筋に付着しており(図3)、一部腱索を巻き込でいたものの、僧房弁からは遊離していた(図4)。その他の臓器および枝肉に著変はみとめられなかった。



図1：心臓内膜面

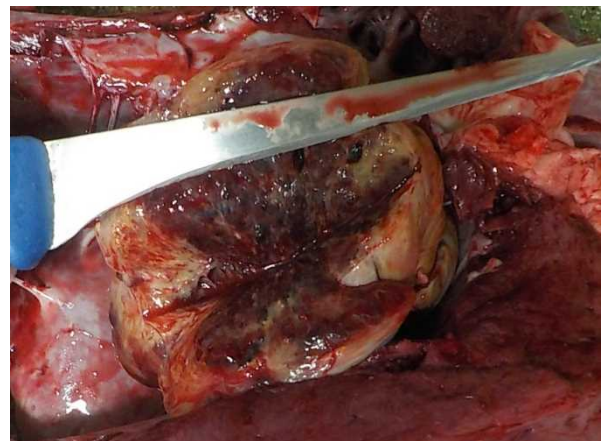


図2：腫瘍断面

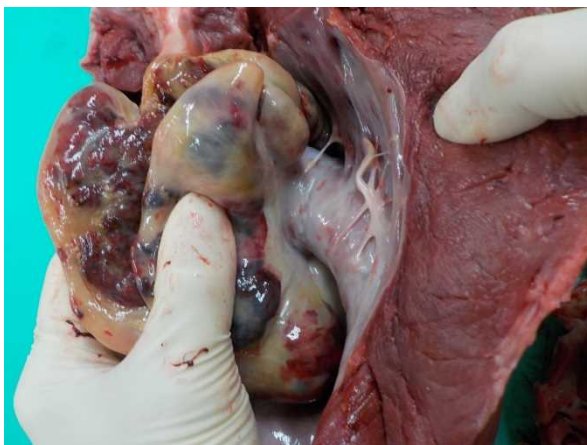


図3：左室乳頭筋に付着

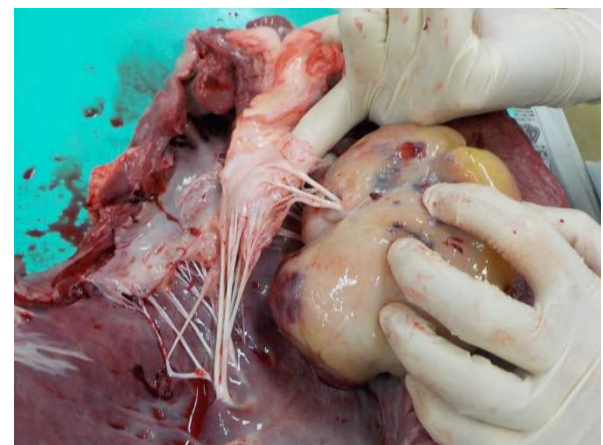


図4：僧房弁との連絡はみとめない

【組織所見】腫瘍部は紡錘形細胞の束状、交錯状配列を呈する部位と血管が海綿状に増殖する血管腫様構造を呈する部位が混在していた（図5、6、7）。両方の組織において特徴的な大型細胞の出現をみとめた（図8）。

乳頭筋への付着部では、腫瘍細胞の増殖により境界は不明瞭であったものの、心筋細胞間への明らかな浸潤はみとめられなかった。

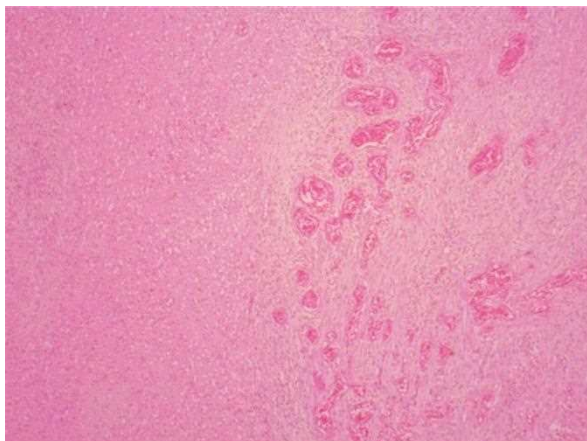


図5：腫瘍H E 染色 40 倍 混在部

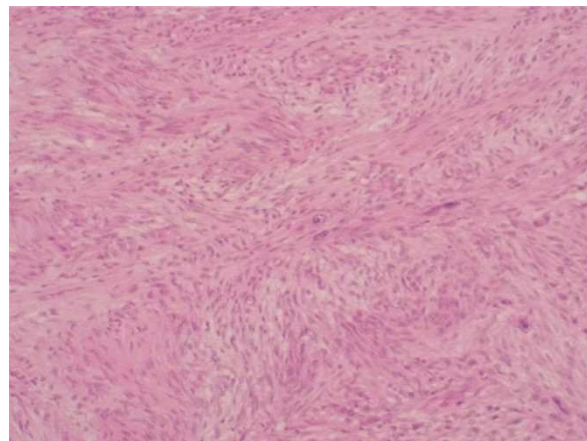


図6：腫瘍H E 染色 100 倍 束状、交錯状部

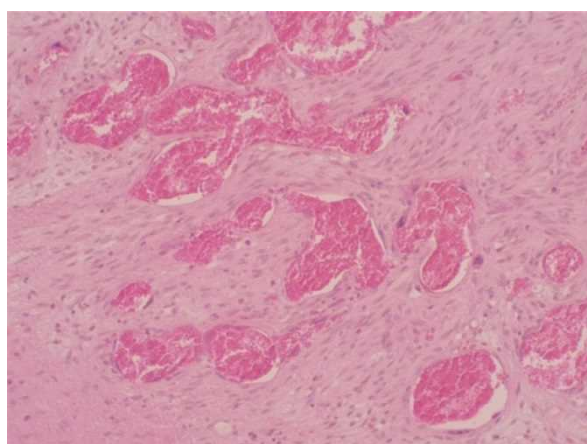


図7：腫瘍H E 染色 100 倍 血管腫様部

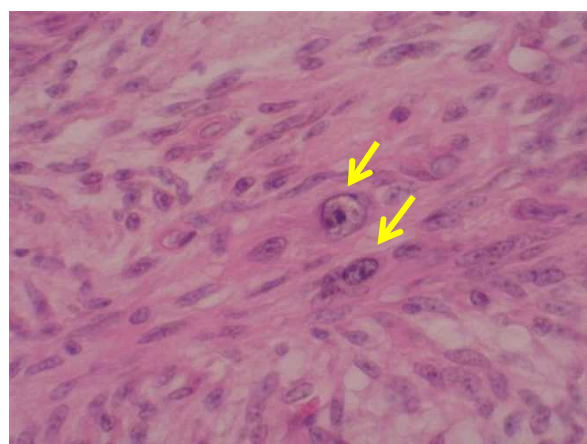


図8：腫瘍H E 染色 400 倍 大型細胞（矢印）

【診断】心臓血管筋腫

【行政処分】部分廃棄（心臓のみ）

#### 4. 考察

本症例は、肉眼的および組織学的特徴から、牛での発生がみとめられている心臓血管筋腫であると診断した。心臓血管筋腫は牛の心臓原発性腫瘍の中では発生が最も多く、今回は典型例と考えられた。と畜検査で心臓腫瘍をみとめた場合、保留検査の必要性の有無を判断するために疣贅性心内膜炎、もしくは心臓原発性の牛白血病との鑑別が必要となる。心臓血管筋腫はその発生部位が左室もしくは右室の乳頭筋に多く、弁からの発生は比較的少ない。また表面平滑で弾力のある腫瘍であり、強く圧しても崩れることはない。これらのことにより、三尖弁に好発し脆弱な腫瘍を形成する疣贅性心内膜炎や、右心耳に好発し剖面髓様の腫瘍を形成する牛白血病との鑑別が可能であると考ええる。疾病の特徴を知ることは現場での迅速な判断に有益であり、今後も知識の集積に努めたい。